

---

## 【12】番外編\* 莉乃の、とある冬

玲（れい）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【12】番外編\* 莉乃の、とある冬

### 【Nコード】

N7229Z

### 【作者名】

玲<sup>れい</sup>

### 【あらすじ】

【12】 December の番外編

これから増えるかもしれません。

第1弾は主人公、莉乃と実の最初で最後のご対面。

**（前書き）**

分類微妙、申し訳ありません。

「莉乃の、とある冬」

みやびが居なくなつて5日。

どたばたと忙しくかけずりまわっていた勤務もようやくひと段落つき、行きつけの酒場で新聞を見つけた。

自分じゃあ、みやびが消えた理由なんぞに興味は無い、と思っていたが。

『……両国の王子が死んだから、悲しみに耐え切れなかったのかも』  
——桜がそう言ったとき、なにか引つかかった気がした。

『両国の王子つつと？』

口から言葉が出ていた。誰だっていいだろ、そんなもん。そうは思つていただけ。

『実様。10月の終わりごろに遠征失敗で亡くなつたらしい』  
名前を聞いた瞬間、走馬灯のように記憶が蘇ってきた。

「実！来てくれたのね！」

みやびがうれしそうな顔を見たのは今年の初め。実と呼ばれた王子は、また随分と優男だった。

雪が舞っていて寒い、と文句を垂れるクセに、彼が来ると、みやびは傍へと駆けた。

——ああ、好き、なのか。

それだけで、彼女が彼を慕っていることが分かった。

いつも遠巻きに見ているだけだったが、1度だけ話したことがある。たしか、手袋を探していたときだ。

普段どおり窓拭き・食事の準備を終え、部屋に戻る途中で、ふと窓を見ると新雪だった。

思い切って、外に出てみた。裏庭を横切って、勝手口から中に入ればいいと思って。

ガチャリとドアノブを回した。

途中で手袋がスカートのポケットから零れ落ちたことにも気付かずに。

結局、気付いたのは裏庭の中枢に来てからで。

ちくしょう何で無いんだどこに落としたと手をさすりながら探していると、声がかかった。

「そのメイドさん。何かお探しですか？」

振り返って見ると、あの優男。

名前は、確か——実、とかつていったっけ。ちらりと視線を上げると目があった。

「もしかして、手袋をお探しかい？」

「そうですけど？」

王子に対してこんな態度を取るのには本来ならありえない。

ただ、この寒い中、暖かそうなコートに身を包んだイケメンと話しか、それとも手袋を探すか。

——天秤にかけたら手袋探すだろ。うん。

そう心に決めていて、莉乃は煩わしそうな表情を實に見せた。  
しかし、そんな彼女を気にすることなく、彼は言った。  
「これかな？と思ってね」

すつと上げた腕の先には――間違はなく自分の手袋。

「あ！」

反射的に手を伸ばして、気付いたときにはひったくっていた。

「そんなに寒かったのかな？」

「寒かったな、こちらへん雲の海みたいだし」

「雲の海？」

「真つ白で少しも間が無くて、冷たくて、雲の海みたいじゃね？」

敬語を使わないことには気付いていたが、今頃変えるのもおかしい  
だろう。と思う。

「…そうか、雲の海、ね。」

「？」

「いや、いい名前だな、と思ってさ。それ、本当にある言葉？」

「…どーだろうな。ただ単に、今、思ったから言ってみただけだ。」

その言葉、好きだなあ。と笑った顔は流石、元が良いだけある、と  
思う。

本人にはもちろん、同期にも口が裂けても言えない事だが。

寒さのせいかな、それとも――

紅色に染まった頬に手を当ててみて、ふと彼がここにいることに疑  
問をもった。

「あんた、みやびに用か？」

「え？ああ、まあね。ちょうど行くところではあつたけど」

「なら、さっさと行ってやってくれ。うちの姫さんは機嫌損ねると  
被害をこうむる奴が多くなっちまうからな」

実際、みやびの嫉妬は恐ろしい。こんな現場を万が一、見られていたら後で何て言われるか。

「ふ…、へえ？そうなんだ？まったく、困ったものだね」

「人事だと思って軽く見やがって。いいから行けよ」

しっしっ、と手であしらうと、彼は微笑んだまま、わかったよ、と踵を返した。

後ろ姿を見つめていたが、莉乃も続けて歩き出す。やっぱ、さみい。中に入るか。

勝手口に手をかけたときに、気付いた。

——あ。

振り返ったが、もう彼の姿は無い。

「やっべ。——礼、言ってねえじゃん」

ポケットから拾ってもらったモノを見る。彼が拾ってくれなければどのくらいここで探し続けただろう。

「さんきゅな」

届かないと知っていても、なんとなく言いたかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7229z/>

---

【12】番外編\* 莉乃の、とある冬

2011年12月24日01時02分発行